

教職課程における器楽教育に関する実践的研究

Practical Teaching Methods on a Music Teacher Training Course

永島 茜，末原 諭宜，横田 賢司，西本 淳
奥野 敬子，北口 晋之，神山 年子，菊萌 文子

NAGASHIMA Akane, SUEHARA Tsuguyoshi, YOKOTA Kenji, NISHIMOTO Jun
OKUNO Keiko, KITAGUCHI Nobuyuki, KAMIYAMA Toshiko, KIKUHO Ayako

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

教職課程における器楽教育に関する実践的研究

Practical Teaching Methods on a Music Teacher Training Course

永島 茜* 末原諭宜** 横田賢司** 西本 淳**
奥野敬子** 北口晋之** 神山年子** 菊萌文字**

NAGASHIMA, Akane SUEHARA, Tsuguyoshi YOKOTA, Kenji NISHIMOTO, Jun
OKUNO, Keiko KITAGUCHI, Nobuyuki KAMIYAMA, Toshiko KIKUHO, Ayako

キーワード：器楽教育 管弦楽器教育 電子楽器教育 邦楽教育 教職音楽教育

はじめに

本稿では、教職課程における器楽教育について、フルート、クラリネット、サクソフォーン、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ギター、電子楽器、箏の各器楽実技における指導実践について報告する。それぞれの指導において、受講生はこれらの実技とは異なる専攻実技や領域で学んでおり、本稿で取り上げた器楽学習が受講生の各専門領域や将来の教育活動に寄与できることが望まれる。

1. フルート実技（科目名「副科器楽A」）

「副科器楽A」（フルート実技）は、例年演奏学科2年生のうち、2～5名の受講者がおり、本年度は3名が履修したが、最終的には、2名が履修することになった。2名とも主専攻は声楽であり、副科器楽A(前期)、副科器楽B(後期)として受講している。受講動機は、2名とも以前から興味のある楽器ということで、前期の副科器楽Aでは、15回授業を受講したのち、定期試験でそれぞれ「野ばら」、「春へのあこがれ」を演奏した。本科目の講座概要は下記のとおりである。

目的：自らの専門以外の楽器の奏法の習得を目的とし、広く器楽教育の視野を持てるようにする。本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

到達目標：フルートに関する基本的な知識、及び基礎的な奏法を習得する。自分の専門実技以外の楽器の習得を目指す事により、それを伝える方法を自ら考える。

教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容：フルート奏法の技術習得のためのレッスンである。

上記目標を達成するため、音楽を表現する上でのプレスコントロール、フレージング、アーティキュレーション等に特に重点をおいて修得する。

フルートは、初めから現在のような形で存在してきたわけではなく、18世紀までは、木の管に、口を当てて音を出す孔と、音階をつくる為の孔が7個あいているだけの単純な形であった。当時の楽器では、音量が大きくなく、派生音に対する運指が、とても複雑で、演奏が困難であった。時代の変遷と共に、大きな音を求められるようになり、改良が行われ、音量を出す為に指ではふさげないような大きな孔をあけて、派生音がたやすく演奏できるように、12個の孔をあけ、指の数ではふさげないので、キーというものを考え出し、19世紀中頃に、ほぼ現在の形になった。

* 応用音楽学科講師 ** 応用音楽学科非常勤講師

当初は、木の管に金属のキーをうめこんで作られ、そのために楽器が割れやすく、その後、金属で作られるようになった。現在では、一般的にフルートは金属でつくられているが、木の柔らかい音が見直され、木管のフルートを使用するフルート奏者も増えている。

以上のような楽器の歴史や構造についての説明を充分した上で、楽器の取り扱い方から、実際のレッスンへと進めた。レッスンを始める前段階として、次の①～③の内容についての意識を常に忘れずに、練習をしていくように伝えた。

①音とは、空気の振動(波動)であり、良い音とは空気の振動が、どこまでも続いていき、いつの間にか、空気の中にその振動が消えていくのが、良い音である。そのいつまでも振動が続く為に、管楽器奏者や声楽家は、腹式呼吸(横隔膜による呼吸)が必要になってくる。

②演奏という行為は、聴いている人達の気持ちを惹きつけ、その心をゆり動かすことである。常に、そういう意識で、音を出さなければならない。これは、音出しの練習の時でも意識しておくこと。

③楽譜は、あくまでも設計図であり、楽譜どおりに音を出しても、それだけでは音楽にならない。逆に、好きな曲であれば、何度もその音楽を聴くことにより、楽譜など見なくても、その曲を歌えるようになる。演奏する人は、楽譜にとらわれてはいけぬ。

フルートを使って、音楽を表現することの土台となる腹式呼吸は、非日常であり、毎日の訓練によって少しずつできるようになる。授業では、音出しの前にまず、腹式呼吸の訓練から入る。

フルートの音が鳴るしくみを説明したのち、頭部管だけを使った音出しの練習から始めた。最初は、なかなか音が鳴らなかったが、根本的な息遣いの訓練と共に、少しずつ音が出せるようになってきた。

楽器を組み立て、音階練習等に入ってくると、楽器を支える事が難しく、頭部管だけでは、鳴っていたものが、口がずれて鳴らなくなったりしたが、少しずつ楽器を支える事のバランスを取りながら、吹けるようになってきた。

新しい音を覚えるごとに運指の難しさや、息遣いの微妙な変化を掴みきれずに、息が止まった状態になってしまった。そのような時には、常に①②③の意識に戻り、フルートを吹かずに階名を歌いながら指を動かしたり、アーテュレーションを歌いながら指を動かしたりする練習をした。

そのことにより、音楽を表現するための息遣いができるようになり、演奏技術が向上した。その結果、定期試験において、1人は「春へのあこがれ」、1人は「野ばら」を演奏することができるようになった。学生からは、思っていた以上に難しいという声がかえてきたが、一方で、腹式呼吸の訓練は、主専攻の声楽に役に立っていると感謝の声がかえてきた。

引き続き後期は、「副科器楽 B」として学習を続けているが、前期「副科器楽 A」の講座概要に加え、基礎的なフルート奏法を確かなものにし、専門外の楽器を研究することで、学校教育の現場における多様な音楽教育への理解を深めるとともに、音楽性を高めることが目標となっている。後期においても、上記の①②③の意識を基本において、反復練習をしっかりとしながら、上達を目指して指導している。なぜなら学生の音楽表現に対する意識や、理解が高まることにより、学校教育の場において、音楽を教授することにも役立つと考えているからである。教職に就いた場合に、本授業で得た知見が活用できるようにさらに授業を工夫していきたい。

(末原諭宜)

2. クラリネット実技 (科目名「副科器楽 A」)

クラリネットは、日本では吹奏楽においてポピュラーな楽器である。本年度の受講生 4 名のうち 2

名が中学，あるいは高校の吹奏楽部でのクラリネット経験者である。この授業は原則としてグループレッスンで行われるが，経験者と初心者が混在している状況でグループレッスンのみで対応するのは難しいため，適宜時間を配分しながら対応している。本科目の講座概要は下記のとおりである。

目的：自らの専門以外の楽器の奏法の習得を目的とし，広く器楽教育の視野を持てるようにする。本科目は，中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し，教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

到達目標：クラリネットに関する基本的な知識，及び基礎的な奏法を習得する。教職課程履修学生は，学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容：クラリネットの基本的奏法を学び，簡単な曲を演奏できるようにするとともに，自分の専攻実技とは違ったアプローチから音楽を考えてみることによって，音楽性の更なる発展を目指す。

初回の授業では，クラリネットの成り立ちや歴史，楽器の構造等を簡単に説明している。この授業で用いられる B \flat のクラリネットは移調楽器であるので，楽譜に書かれている見た目の音（記符音）と実際に出る絶対音（実音）が違う点，及びオーヴァーブローイングによって得られる音程が，他の管楽器のように 1 オクターヴ上ではなく 1 オクターヴと完全 5 度である点に関しては，運指表などを見せながら注意を喚起している。

管楽器を演奏する上で，最も基本になるのは呼吸法である。そのため実際に楽器で音を出す前に腹式呼吸について解説し，その仕組みや練習方法を学習することになっている。その後実際に楽器を手にした練習に移る。

クラリネットはケースにしまわれた状態では 5 つのパーツに分解されており，演奏の前にはこれを組み立てる必要がある。その際は，楽器を破損しないよう十分に注意が必要である。また，正しく組み立てられていないと楽器はその性能を十分に発揮することができないため，口頭及び実演を交えて指導を行っている。楽器の組み立てには各人において様々なやり方があり，経験者の場合には自分独自の方法を身につけていることが多いが，この授業の際には，筆者が最も合理的と考える方法に統一している。その際なぜ筆者の方法が合理的であるのかを説明している。清掃，分解に関しても同様である。管楽器の場合は，楽器の日常のメンテナンスも含めて奏者の責任・実力であるため，受講者にもそのような意識を持ってもらいたいと考えている。

クラリネットは独奏の際には通常立って演奏するが，初心者には最初から立って演奏するのは難しい。そのため，最初は座った状態から練習を始めている。座った状態での正しい姿勢を学習した後，立った状態での正しい姿勢を学ぶ。いずれの場合にも安定して楽器を構えられることを重視し，不必要な動きをしないよう指導している。特に楽器で拍子をとる動きは非常に有害であり，気づいたらすぐにやめさせている。

クラリネットは 1 本 800g 程度の重さがあり，これを右手の親指一本で支えなくてはならないが，これは初心者にとっては負担が大きい。最初の音出しは左手を使わない音から始めるので，この間は左手を補助に使わせる，または椅子に座って膝を補助に使わせるなどの方法で負担を軽減するようにしている。その後，右手だけで楽器を支えられるように指導する。また，比較的短時間で交代させながら吹かせることによって，疲労を軽減できるよう留意している。どうしても右手の負担が大きく苦痛を伴う場合には，ストラップを使用する方法があるが，初心者の場合はかえって弊害の方が大きくなり理想的な結果は得られないようである。

ロングトーンは管楽器の基礎練習として，最も基本的かつ重要なものである。実際の指導では，出だしから終わりまでしっかりと安定した音で，息を最後まで吐ききることを重視している。ともする

と単に音を長くのばすことにとらわれてしまい、息を殺してしまうケースが非常に多く見受けられるが、その都度注意し、また手本を示すなどして指導している。

運指は基本的に楽器の上管から下管(左手から右手)に学習していくが、左手の親指と人差し指、右手の人差し指には特に注意が必要であり、そのための練習方法を提示し、くりかえし練習するよう指導している。また特に、初心者の場合トーンホールをうまく塞げないケースが出てくるが、これは前述のように右手親指で楽器を支えられるかどうかが鍵となる。この場合はもう一度正しい構え、トーンホールの塞ぎ方を確認させるが、場合によっては該当するトーンホールを指導者が塞いで、楽器が正しく鳴っている状態を体験させるのも有効と考える。また運指に限らず練習の際に鏡を使用することは、様々な点で非常に効果的であると考え、そのように指導している。

美しい音を出すためには息とともに、口腔内の空間のコントロールが重要である。これは外国語の発音を習得するのと似ていて、本来は耳で聴いた響きをそのまま再現出来れば理想であるが、この授業ではできるだけ言葉で具体的に説明するようにしている(広く・狭く、深く・浅く、ウに近く・オに近く、など)。自分の音の響きを聴くことは上達する上で必要不可欠であり、常に注意を喚起している。

実際の演奏では、与えた課題に対して技術的な問題があれば、その都度その状況にふさわしい練習方法を提示している。基礎練習では全員に同じ課題を課しているが、曲の場合は一人一人のレベルの違いが大きいため、その学生のレベルに合った物を与えている。指導の際にはフレーズ感を重視し、自然に歌うことを目標に学習させている。

後期の「副科器楽 B」では、前期に学んだ基礎技術をさらに確実なものにするとともに、より高度な音楽性を身につけられるよう授業を進める。将来、教育実習あるいは教職に就いた際には音楽の授業だけでなく、吹奏楽部の指導などを行うかもしれない。そのような時にこの授業で学んだことが有効に活用されるとすれば幸いである。さらにこの1年間の経験が受講者の音楽の幅を広げるための一助となる事を願っている。

(横田賢司)

3. サクソフォーン実技 (科目名「副科器楽 A」)

サクソフォーン実技は例年演奏学科2年生のうち、1~5名の受講者がおり、本年度は2名が受講している。主専攻は声楽、ピアノであり、副科器楽 A (前期)、副科器楽 B (後期) として受講している。受講動機は「主専実技の声楽に生かしたいと思い、副科器楽では息を使う吹奏楽器に取り組みたいと思った」「家族がサクソフォーンを演奏しているので興味を持った」ということで、1名がイタリア歌曲「O mio babbino caro」もう1名はディズニー映画「アラジン」より「A Whole new world」を演奏した。それぞれの学生が親しみのある作品に触れ、サクソフォーン演奏により興味が持てるように、自主的に試験曲を決めるよう指導している。本科目の講座概要は下記のとおりである。

目的：自らの専門以外の楽器の奏法の習得を目的とし、広く器楽教育の視野を持てるようにする。本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

到達目標：サクソフォーンに関する基本的な知識、及び基礎的な奏法を習得する。教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容：サクソフォーンの基本的奏法を学び、簡単な曲を演奏できるようにするとともに、自分の専攻実技とは違ったアプローチから音楽を考えてみることによって、音楽性の更なる発展を目指す。

教職課程履修学生は、中高教育実習での研究授業場面や卒業後の中高正規授業での指導場面を想定

し、本科目の修得内容を活用しつつ、「中高教科の自主的教材研究」に主体的に取り組む。その際、当該教科の学習指導要領及び教科書等を積極的に活用する。

1846年にベルギーの楽器製作家、アドルフ・サククスによって発明されたサクソフォーンという楽器は、当時の管楽器の問題点を改善したものであった。野外での演奏、大きなホールにも対応できるような幅広いダイナミックレンジ、運指の簡略化、発音の容易さが主な特徴である。そのため、初心者にも親しみやすく、受講生も大変熱意をもって積極的に受講している。

授業で取り扱う内容は、概ね授業計画とおりに進行したが、まず毎回の授業の初めに、器楽奏者には欠かせない音階練習を取り入れた。前期はシャープとフラットが5つまでの長調を指導したが、アルトサクソフォーンは変ホ調の移調楽器であるため、固定ドの感覚を持つ2名には少々違和感を感じたようである。またサクソフォーンはストラップを首に掛け、それに楽器を付け演奏するため、できるだけ身体に負担のかからない構え方、楽器の支え方を常に注意し授業を進めた。2名とも初めて触れるリード楽器のため、リードの良し悪し、使用方法、管理の仕方の指導も行い、天然のケーン（リードの原料・葦の一種）の繊細さに大変興味を持っていた。

サクソフォーンの指導において特に重点を置いたのは、管楽器奏法の基本であるアンブシュア、そして息の遣い方である。アンブシュアに関して、特に口の中の状態は見るできないため、口笛を吹くようなイメージをもたせ指導したが、長時間の演奏になると崩れ、指導に大変苦労した。この件に関しては、より学生に伝わりやすい指導法を考えなければならず、後期の授業での私自身の課題となった。

息の遣い方に関しては、まず楽器を持たず、素直にまっすぐな息を吐く練習から始め、そのまま同じ息の流れを楽器に吹き込む指導をした。それらの基本的な練習を繰り返し指導しながら、最終的に前期試験では前述したように「O mio babbino caro」「A Whole new world」を演奏できるようになった。

前期の副科器楽Aを履修した受講生からは「サクソフォーンという楽器を通じて、苦手な息を流す練習ができた。今後の主専実技で直面し続けるであろう、息の使い方に関する問題解決に役立つと考えている。」（声楽専攻生）、「音楽の表現方法に関する自身の悪い癖に気付くことができたので、サクソフォーン以外の楽器を演奏する際に生かしたい。」（ピアノ専攻）という意見が寄せられた。

近年、学校現場における吹奏楽活動が非常に盛んであり、将来、教職に就くためには管打楽器に関する深い知識が求められるであろう。前期ではサクソフォーンに興味をもたせ、楽器に親しむことを意識して指導してきたが、後期の副科器楽Bでは、より専門的な知識を交えながら授業を進めたいと考えている。

（西本 淳）

4. ヴァイオリン実技（科目名「副科器楽A」）

副科楽器の受講は、演奏楽器2年次におこなわれ、いくつかの楽器の中から学生が選択できるが、その中でもヴァイオリンは毎年5～6名の受講者があり、学生のこの楽器に対する関心度を感じさせられる。その理由として豊かな低音から輝かしい高音までの音色を持つ旋律楽器であること、また一人（ソロ）二人（デュオ）三人（トリオ）と同じ楽器同士でも人数が増えるたびに、形態を変えたアンサンブル可能な楽器であること等が音楽的観点から見て考えられる。

楽器の習得は、本来多くの時間がかかり時に困難を伴うものであるためヴァイオリンは幼少期から

習得するのが理想であり、そのために子どもの体に無理な負担が掛からぬよう、また、機能的なテクニック習得のために成長に合わせフルサイズの楽器になるまでのサイズが6段階ほど変わっていく。

しかし、フルサイズを使う年齢になってから習得を始めても演奏は可能であり、音楽的基礎知識やしっかりした音感を持っている主専攻ピアノ・声楽の学生にとってはより親しみやすい楽器になっている。本科目の講座概要は下記のとおりである。

目的：自分の専攻以外の楽器演奏の習得と表現方法を学ぶことにより、広く器楽教育の視野を持ち教職における器楽教育実践に役立てる。

到達目標：ヴァイオリンに関する基本的知識と基礎的な演奏法の習得。

授業内容：ヴァイオリンの基本的奏法を学び、その中で演奏可能な曲を練習していく。自分の専攻実技とは違う角度からの音楽への取り組み方を身につける。

指導にあたり、限られた一定期間の中で楽器への理解、演奏技術の習得を高めるため要点を絞り込み、より効率の良い授業を目指した。前期では主に楽器と身体の相対関係について指導した。

まず、楽器の音を出す前に楽器の構造や各部分の名称、取り扱いの説明をし、ヴァイオリンの歴史についての話もとりいれながら、知識的理解を深められるようにした。

次に、安定した楽器の支え方は安定した姿勢の上に成立するという考えのもと常に注意を払って楽器の構え方を指導した。演奏する際の右手(運指)と左手(運弓)の動きの方向はそれぞれ異なり、特に左手は前腕部を軽くねじり弦を指で押さえるため初心者にとって慣れるまでは少々身体に負担を感じる場合が多い。右手は長い弓を支えながら弦の上を左右に動かさねばならず、身体全体に無駄な力が入りやすい。この無駄な力は演奏の妨げになることが多いので、なるべくリラックスした状態で楽器を保てるよう指導した。

音を出す段階では、運指と運弓を分けて学習を進めた。ヴァイオリンの4本の開放弦をそれぞれゆっくり弓を動かしながら弾くロングトーンの練習を多く取り入れた。弓を持つ自分の腕や手首の状態を観察し、力の入れ具合を加減しながら音を発するこの練習は自分の身体の内面を見つめ、呼吸との関連も自覚できるので主専攻のピアノや声楽にも応用できることが多いと思われる。

運指においては、弦を押さえる指の形に注意しながら音程と指の配列の関係を確認し、自ら音を創る意識を持てるように指導した。また、4本の開放弦をそれぞれ主音とする音階を練習し、その音階を基にした楽曲へと学習を進めた。運弓では、まず音階を用いて様々なボーイングテクニックの練習をし、それが生かされる楽曲を選び演奏した。楽曲については同じ旋律を繰り返し用いるものや親しみやすいもの等、基本的練習から無理なく移行できるように工夫している。しかし、ボーイングテクニックに苦勞する学生は多く、ゆっくり反復練習することを心がけた結果、全員が揃って歩を進めることができ、楽しく興味を持って演奏できるようになった。前期では5～6曲を順次練習していき、実技試験においては学生自身の中から1曲選び、ピアノ伴奏付きで演奏する方法をとった。

後期は、副科器楽Bとして前期の学習を踏まえ、ヴァイオリン演奏技術と音楽的表現の更なる向上を目指す。それと共に、多様化する現在の学校音楽教育現場に対応できる豊かな理解力、音楽力を身につけることが目標である。

(奥野敬子)

5. ヴィオラ実技 (科目名「副科器楽A」)

ヴィオラ実技は例年演奏学科2年生のうち、1～3名程度の受講者がおり、本年度は3名が履修して

いる。全員が主専攻はピアノであり、副科器楽A（前期）、副科器楽B（後期）として受講している。受講動機は、人間の声に近い音色に惹かれた（1名）、他の学生があまり選択しない楽器を学びたかった（2名）ということで、前期の副科器楽Aでは、15回授業を受講したのち、全員が定期試験で「浜辺の歌」を演奏した。本科目の講座概要は下記のとおりである。

目的：自らの専門以外の楽器の奏法の習得を目的とし、広く器楽教育の視野を持てるようにする。本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

到達目標：ヴィオラに関する基本的な知識、及び基礎的な奏法を習得する。教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容：ヴィオラの基本的奏法を学び、簡単な曲を演奏できるようにするとともに、自分の専攻実技とは違ったアプローチから音楽を考えてみることによって、音楽性の更なる発展を目指す。

ヴィオラは、ヴァイオリンと同じように左肩で楽器を支えて構え、左手で運指、右手で運弓する奏法であるが、楽器が大きく弓も重いので、楽器を構えることにヴァイオリン以上の負担がかかる一方で、音が響きやすいという特性が挙げられる。

授業で取り扱う内容は、概ね授業計画とおりに進行したが、具体的には全15回の授業を①～③の段階に分割し、それぞれの段階に5回程度を割り当てて、①楽器の取り扱い、楽器の構造と原理の理解、調弦、②第1ポジションの体得、③楽曲演奏に主軸を置いて指導した。

楽器の取り扱い、楽器の構造と原理の理解、調弦では、はじめに楽器をケースに入れた状態での運搬方法、楽器の清掃方法、楽器の取り扱い方を伝え、次にプリントなども用いて楽器の構造と音を鳴らす原理を示した。これらの過程を経てから、調弦へと進めた。なぜなら、受講生は全員がピアノを専攻する大学生であるため、楽器の取り扱い方や奏法を体得するのみではなく、構造や原理を理解した上で実技に取り組む方がヴィオラの実技のみならず、主専攻のピアノについてもより理解が深められると考えたためである。

これらの段階を経て、第1ポジションの体得の段階では、先ず運指と運弓を分けて学習するようにした。運指については、第1ポジションの押さえる場所と指が一致するように楽器を脇に抱えた状態で音階をピッツィカート奏法で演奏できるようにしてから、楽器の構えと運弓へと進めた。肩で支えている楽器の重さを腰で受け止められるようなイメージで楽器を構え、弓を弦上で静止する状態を経て運弓練習を行った。

運弓については、はじめに開放弦を弾けるようにし、そこから移弦のない一弦上で音列を押さえるようにした上で、音階へと学習を進めた。

このように楽器の構造や原理を理解し、音階が演奏できるようになった段階で、楽曲演奏を取り入れ、実技試験における演奏を目標として、曲想など表現を含めた演奏指導を行った。指導にあたって、楽曲演奏の段階になると、基本的な奏法を応用する運指や運弓が登場することもあり、指導の難しさを感じられる場面もあった。そのような場合は、一旦楽曲を離れ、楽器の構え、運指、運弓、曲想などの要素ごとに動作を単純化して練習してから、再度楽曲演奏を行うよう努め、試験では「浜辺の歌」を演奏することができるようになった。引き続き後期は、「副科器楽B」として学習を続けているが、前期「副科器楽A」の講座概要に加え、基礎的なヴィオラ奏法を確かなものにし、専門外の楽器を研究することで学校教育の現場における多様な音楽教育への理解を深めるとともに、音楽性を高めることが目標となっている。

後期においては、前期で体得した基礎的な奏法を授業前半に行い、授業後半で楽曲演奏に取り組む

よう1回の授業で基礎と応用を並行して学習するようにしている。また楽曲演奏では、適宜重奏なども取り入れたいと考えている。

これらの授業を経て受講生からは、楽器を構えることが予想以上に難しかったが、弦楽器の構造と原理が理解でき有益であったという意見が寄せられた。今後は、これらの課題に対応しつつ、受講生が教職に就いた場合に本授業で得た知見が活用できるようにさらに授業の工夫をしていきたい。

(永島 茜)

6. チェロ・ギター実技(科目名「副科器楽A」)

副科チェロ・副科ギターは例年、演奏学科2年生のうち、各楽器に対して3~5名の受講者がいる。本年度はチェロ3名、ギター3名が履修しており、副科器楽A(前期)、副科器楽B(後期)として受講している。本科目の講座概要は下記のとおりである

目的：副科器楽(チェロ・ギター)はそれぞれの器楽専攻のように、将来、自らの専攻する楽器の演奏を職業とするのではないので、高度な演奏技術の習得が目的ではなく、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を正確に正しく修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

到達目標：チェロ・ギターの様々な基礎技術や楽器の構造、歴史などを幅広く身に付け、与えられた課題を慎重に且つ真面目に自発的に取り組む姿勢を養う。そして前期、後期の実技試験に於いて、習得した演奏技術を用いて適度な曲を演奏する。

教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容：チェロ・ギターの基本奏法を習得し、簡単な曲を演奏できるようにするとともに、自分の専攻実技とは違ったアプローチから音楽を考えてみることによって、音楽性の更なる発展を目指す。

チェロ、ギターの演奏技術の修得には繰り返しの基礎練習が重要なため、毎講義の前半に、ウォーミングアップを兼ねて、入念な基礎練習に時間をかけるように心がけている。このウォーミングアップは、自主的に講義前に時間をかけて入念に行うべきであるが、他の講義時間との兼ね合いもあり授業時間の中に組み込まざるを得ない。ウォーミングアップ(基礎練習)の内容は以下のとおりである。

① チェロ

ボーイングの練習。運弓のテクニックが演奏の成功に大きく左右するので特に時間をかけるべきであると考え。具体的には、まず正しい弓の持ち方を確認し、それから各弦において一定の音量で且つ、弦に対して直角に保ちながら、開放弦で全音符のロングトーンを練習する。

左手については将来、正確な音程を保てるよう第一ポジションでの正しい基本型を覚える。基本型とはD線上で全指を等間隔で定位置に迷いなく置くことである。

② ギター

各開放弦でアポヤンド奏法、アルアイレ奏法をさまざまなテンポとリズムで練習し、次に開放弦でのアルペジオの練習をする。左手については各指頭で正しく押弦し、音階の練習を入念に練習する。これはウォーミングアップであるがギター演奏にあたって重要な基礎練習となる。

最初に十分なウォーミングアップをしたのち、シラバスに則して講義(レッスン)を進めていくのであるが、自身の専攻楽器ではなく副科であるが故、普段の練習に十分に時間がとれないことを理解して、授業計画をたてなければならない。

この講義で使用する教本であるが、チェロはウエルナーチェロ教則本上巻。ギターはカルカッシギター教本を使用するが、副科チェロ、副科ギターの講義は毎週1講義で前期、後期ともに15回の講

義数を考えると、十分に各教本を習得するには時間的に不十分であると思われるので、各教本から最低限度、必要な部分を抜き出して使用することになる。

前期、後期試験期間中に行う2回の定期試験では、修得した技術を発表できるよう、簡単ではあるが音楽的に劣らない曲を選定し、ピアノ伴奏付で演奏する。以上のことを念頭において前期、後期の各15回の講義をシラバスに順守しながら進めていく。

教職課程履修学生は、この授業科目終了後、教職課程履修カルテの自己評価シート欄に必要事項を必ず入力し、成績評価発表以降に、成績とともに担当教員によるコメントを参照し自己の学習状況について把握する。さらに、学生は、中高教育実習での研究授業場面や卒業後の中高正規授業での指導場면을想定して、本科目の修得内容を活用しつつ、「中高教科の自主的教材研究」に主体的に取り組む。その際、当該教科の学習指導要領及び教科書等を積極的に活用する。

(北口晋之)

7. 電子楽器（科目名「実用楽器入門」）

科目名「実用楽器入門」は、応用音楽学科2年生の専門教育科目で、音楽療法士（補）の受験資格に伴う必修科目である。この授業は1年間の通年科目で、前期では、打楽器4回、ギター11回、後期では、電子楽器15回を、各専門楽器の3名の講師で、オムニバス形式で進め、毎年、20名程度の受講者がいる。

目的: 自分の専門以外の電子楽器、ギター、打楽器についての幅広い知識と基本的な演奏技術の習得を目標とし、広く器楽教育の視野を持てるようにし、教育セッションや交流の場で応用できる能力を養成する。

本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

達成目標: 科目習得時には、電子楽器、ギター、打楽器について、基本的奏法を修得する。

教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容: 年間で3分割してそれぞれの楽器の基本的奏法を学び、簡単な曲を演奏できるようにするとともに、自分の専攻実技とは違ってアプローチから音楽を考えてみることによって、音楽性の更なる発展を目指す。

(1) 効果的指導法：指導実践事例と留意点

1) 講義と実習/個別レッスンの2本立てで進める授業形態方式

ほとんどの学生が電子楽器未経験者で電子楽器を所有していないため、楽器についての知識・基本奏法実習・活用法等は、講義・実習形式で共通で行い、各自が選曲した自由曲のレッスンは個別チェックで行う。時間的に制約があるため、個別チェックは2グループに分けるので、各人は隔週に当たるようになるが、その分各回のレッスンが丁寧に行える。複数台楽器があり、個別チェックの時間に当たらない人は、ヘッドホンで練習できる時間を持てるため、授業内で真面目に練習すれば、半年である程度の弾きたい曲が完成できる。

2) 授業内での実技テストを、全員の前で発表会形式で行う取り組み

半期終盤に、授業内での自由曲実技テストを実施するが、これを全員の前で発表会形式で半期の集大成として1曲演奏する。このため、学生は目標感をもって授業に取り組む様になり、また、テストを目指した1曲完成の過程で、この授業の目的の一つである電子楽器の基本奏法の習得になる。

3) 電子楽器を有効活用する

電子楽器を活用し総合音楽力を身につけるために、①教育現場で役立つコードネームを学習し、三

段譜だけでなく一段譜での演奏実習を行うとともに、②ベース進行の実習、イントロ・エンディングの作り方、ジャズ・ポピュラー音楽におけるフェイクの手法、移調奏の仕方、コーラス等のアレンジにも役立つ重音奏の手法を学習し、即興演奏の手法を体験する。

なかでも、メロディーフェイク（メロディー変奏）の練習は、即興演奏の中心的要素であるが、複数の学生を対象とした実習では、例えば 16 小節程度のコードネーム付き一段譜のメロディーを、講師が最初の 2 小節を変奏し、引き続きリレー奏で順番に 2 小節ずつメロディー変奏し、前の人の変奏を聴いて即興的にメロディー変奏でつないでいく、これを何往復か繰り返し、回し弾きしていく。こういった手法でトレーニングしていく事により、楽譜から離れて自然に即興力が身に付いていくと思われる。

4) 学生の学習意欲を向上させ、授業受講の必要性の理解を図るための工夫

- ①初回の授業で、幅広いジャンルの中から 10 曲以上講師による演奏コンサートをし、電子楽器紹介と共に学生への興味付けをする。
- ②半期で仕上げる自由曲を、学生自身に弾きたい曲を選曲させることで、学習意欲を高める。
- ③電子楽器の特性として、1 台で色々な楽器の音色やリズムをオールインワンでリアルタイム演奏できる楽器であるので、あらゆるジャンルの曲を体験できると同時に、アレンジ能力が身につく、また、三段鍵盤の特性から、足でベースを踏んで演奏する事により、リズム感も養える。このような電子楽器の効用性や、教育現場に出た時に、幅広いジャンルの音楽の体験をしておく必要性を、学生に講義の中で随所で触れ、実感させる事で、授業に対する積極性も出てくる。
- ④最終授業で、電子楽器のアンサンブル楽器としての特性を活かし、その時期に話題になっている曲で、皆でアンサンブルをし、将来活動するであろう職業現場での先行体験実習をする。パート分け等も学生同士で行い、主体性を持たせる。

(2) 履修者へのヒアリング：前年度の授業アンケートより

- ・「自分が弾きたい曲を選曲でき、難しかったけど弾けたので嬉しかったです。」
- ・「個人チェックで、ポイントを言って下さったので、どこを徹底して練習すればよいのかよくわかりました。」
- ・「的確なアドバイスを頂けて、頑張ろうと思える所がよかったです。」

(3) 今後の授業の進め方についての提案

授業アンケートから、授業の中で、個人チェックの時間を設けて曲を仕上げていく進め方は好評で成果も上がっているため、この手法は今後も継続していきたい。しかし、今後新しい試みとして、各期の授業の中で 1 回程度、皆の前での“公開レッスン”形式でアドバイスする授業の展開も考えている。良い意味での緊張感もあり、また、他の学生のアドバイスを聞くことで、学生各自にとっても勉強になり、より多くの知識も一度に効率良く習得できると思うからである。

共通講義と共通実習の時間以外に、授業内の限られた時間の中での個人チェックの時間を取る事は大変であるが、こういった課題にも対応しつつ、成果の出る丁寧な手法を今後も取り入れ、様々なジャンルの音楽にも対応できる総合音楽力を身に付けられる授業を心掛けたい。学生が将来、音楽療法、教員、音楽教室講師など、音楽関係の職業についた時に、この授業で経験した事が何らかの形で役立つ様、今後とも、授業内容を充実させていきたい。

(神山年子)

8. 箏実技（科目名「邦楽」）

本講座は、多少の増減はあるが、例年、演奏学科（3年）20名、応用音楽学科（4年）10名と、年度によっては教育学科から5名程の受講生がおり、本年度は34名が履修している。一クラスの受講者は10名前後としている。

本科目の講座概要は、通年30回の授業で、日本の伝統音楽の種類と特徴、和楽器の種類と解説、箏の基礎知識、基本の技法・奏法、調絃、楽譜の見方、唱歌、箏の演奏と歌唱、地歌三味線の演奏、箏と地歌三味線の合奏、箏曲「六段の調」の実習、新しい曲の演奏の項目に分け、特に調絃が取れるようになる事、箏曲では最も有名な「六段の調」が演奏できるようになる事を目標として指導する。

目的:学校教育において「和楽器の履修」が義務となっている現状では、その指導者の育成は急務である。その必要性は学校だけにとどまらず、一般社会においても望まれている。本講座では、邦楽を邦楽器（箏）の演奏と歌唱の両面から学び、基礎知識及び演奏法の習得を目的とする。

本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識及び技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。

達成目標:箏の基礎知識を理解できるようになることはもちろんであるが、箏の奏法を習得し、演奏できるようになることを最も重要と考え、到達目標とする。

教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容及び教材に関連づけて主体的に探求する。

授業内容:日本の伝統楽器である箏の歴史及び箏にまつわる日本音楽を学び、演奏においては箏の基本的な演奏法・楽譜の見方・調絃等を実習し、歌唱においては、地歌箏曲の理解、曲の成り立ち及び洋楽と地歌箏曲との発声法の違い等を学ぶ。また、教職を取る学生のために、学校教育における邦楽（箏）の指導をするため、洋楽用語との表現方法の違いを踏まえ、邦楽用語の理解を深める。

箏の実習に入る前に、箏の知識だけではなく、日本の伝統音楽の種類や歴史、和楽器の種類や特性の解説を行うのであるが、約1300年の歴史ともなればかなりの量になり、和楽器も何十種類にもなるので、歴史の場合は種目毎に解かりやすくまとめ、楽器については特徴や特性を記した資料を作成・配布し、さらに理解しやすいように、例えば、能に使用される楽器（小鼓・大鼓・太鼓・能管）に謡を加えたのが、雛祭りに飾る人形の“五人囃子”であり、携えている楽器がそれに当たるというように身近に存在する物や実際に目にすることのできる物、新聞や演奏会のプログラムに記載されている事項を応用したり等の工夫をし、日本音楽全体の知識を深める。そうすることで、日本音楽を身近に感じ、箏に対しても興味を持って実習に入れるように思う。

箏は“こしらえ”と言われる楽器の準備から始め、調絃をして初めて演奏できる楽器だが、この調絃が初心者には大変難しいことである。調絃、すなわち音を合わすためには、決められた指使い、音を取る順番、手順に加え、音が合っているかの聞き分け等、同時に覚えなければならない事が多く、最初は戸惑いもあり、調絃を取るだけでかなりの時間を要するが、毎回、授業開始時に自分が使う箏のセッティングをし、調絃を取るという作業を行い、少しずつ進めていく。繰り返し行うことで、回数を重ねるにつれ、短時間での調絃が可能になり、調絃を取る事と同時に、座り方や正しい姿勢、爪の当て方、基本の弾き方も学ぶことになる。また、基本の調絃である「平調子」も覚えることになるが、直ぐに修得できるものではなく受講生・指導者双方にとって非常に根気が必要となる部分でもある。

次の段階では、楽譜の見方や右手・左手の奏法、唱歌、歌唱の説明後、楽譜を用い、練習曲や「さくら」の実習をする。歌唱については、歌詞の意味を理解し、どのような内容を歌っているのかを考え、箏曲本来の「弾き歌い」で演奏する。しかし、ほとんどの受講生が初めて箏を弾く中、手順を覚

えて弾くだけでも精一杯な段階において、弾きながら歌うのは非常に大変とは思いますが、繰り返し練習を行ううちに弾き歌いができるようになり、受講生達の柔軟さには感心させられる。

ここまでが前期での取り組みとなるが、前期の後半には、受講生は「平調子」が取れるまでになっており、簡単な曲であれば楽譜を見て演奏できるまでになっている。

後期では、三味線の実習も行う。教材では、三味線音楽としては“長唄”を取り上げている場合が多いが、本講座では、箏曲と繋がり深い“地歌”を選択し、三味線音楽、三味線の種類、三味線の構造、地歌と長唄の違い、地歌と箏曲との関連をまとめた資料を配布し、説明する。

時間の制約もあり、三味線の構え方や基本的な奏法だけの実習であるが、その上で「さくら」を練習し、箏との合奏という形も取りながら進める。箏以上に初めて三味線を弾くという受講生が多く、箏同様、容易なものではないが、箏の最初の頃の様子に比べれば楽しんで弾いているように見受けられ、箏との合奏という形も楽しいようで、受講生からはもう少し弾きたいとの声もある。

この後「六段の調」の実習に入るが、前期で学習した基本的な奏法に加え「六段の調」に必要な奏法や楽譜に記されている用語の意味や邦楽と洋楽の用語の記譜の違い等も合わせて説明の上、実習する。数多く弾くことに重点を置き、毎回、授業前半には、前回授業の復習をしてから次の課題に進み、個人で練習する時間を与え、反復練習し、全員での演奏・合奏を繰り返し行う。邦楽は、洋楽と違い大人気で演奏する場合でも指揮はなく、演奏者それぞれが息を合わせて演奏しなければならず、お互いが相手や周りに合わす点では自分本位での考えや行動では成り立たず、演奏を通して協調性を培い、教職の場においても役立ててもらいたい。

また、授業では演奏するだけ、説明を聞くだけにせず、質問や疑問がないかを問いかけ、あればその答えを自分達で導き出せるような方向で進めている。

最終授業では、総仕上げとして「六段の調」の初段を一人で演奏するが、全くの初心者であった受講生も、週に一限、20回程度の授業数で、箏のこしらえ、調絃、基本的な奏法は修得し、演奏も目標に達するまでに上達している。

受講生からは「普段弾くことのない箏が弾ける」、「基礎から学べる」、「一人一人に箏が与えられるのでしっかり練習できる」という声や、「最初のうちは初めてのことや覚えなければならぬことが多いので大変だが弾けるようになってくれば楽しい」、「もっといろいろ曲を弾きたい」との意見もある。これらから、学習していく上で、興味を持つが重要と考える。興味を持つ事により探求心も芽生え、いろんな角度から物事を見たり考えたりする事が出来、こちらが思いも付かない疑問点や質問も出てくる。そのような向上心や興味をいかに引き出すかが指導する立場としては毎回考えるところである。

受講生には本講座で修得した知識や技術を存分に発揮できるように、さらに工夫をしていきたい。

(菊萌文子)

まとめにかえて

以上、教職課程における器楽指導の実践について、専門楽器別に検討を行ってきた。各楽器で習得すべき具体的な内容は異なるものの、受講者は音楽を専門的に学んでいる学生である前提の下、1年間で基礎的な技能が習得できるよう体系的な指導が行われていることが理解された。それぞれの指導内容をみると、①楽器の準備、②楽器の背景と構造、③技術、④音楽のイメージが共通して重視される指導内容として浮かび上がる。①楽器の準備は、楽器の準備段階は、楽器演奏(音楽)の一部であることを示し、②楽器の背景と構造については、受講生が選択した楽器を使って音楽を表現するため

に理解が欠かせない。そして、③技術については、演奏段階では無数の技術が同時に使われるため、練習時には特に重要な技術に焦点を当て、単純化して習得した後に数種類の技術を組み合わせる方法がとられている。④音楽のイメージは、最終的な到達目標であり、楽器を習得していく過程で主軸をなすものである。

今回は、指導内容を中心にまとめたが、今後は受講生からの反応や意見などを集め、より効果的な指導が行えるよう工夫していきたい。